

中国近代化を巡る思想家たちーアジアとの関連で

アジア研究者
岩崎 育夫

はじめにー講演のねらい

タイトルは「中国近代化を巡る思想家たち・アジアの関連で」です。中国を中心に朝鮮とインドの啓蒙思想家の話をしていきます。啓蒙思想家と言う人は近代の人達で、思想家の思想は政治思想の事です。政治思想は端的に言って国家の政治思想のことで、何故この国家が良いのかを正当化するのを政治思想と言うのですが、近代に中国の啓蒙思想家を始めとしてアジア各地で啓蒙思想家達が啓蒙思想を語る、その際に批判されたのはそれ以前のアジアの王朝国家の伝統的思想です。

啓蒙思想家の批判対象になったアジアの王朝国家の伝統的思想はどのようなものを簡単に説明したいと思います。2000 年続いた王朝国家の特徴は一言で言えば国家は皇帝や国王のもので支配者のものであると言う事で、専制支配が行われ国民は税金を払って戦争に動員されるだけのものでしかない、現代国家の様に支配者は国民の幸福の為に何かをする事は一切なく考えになかった、これが王朝国家の政治思想の特徴です。その王朝国家の支配を支えたのは儒教とかヒンドゥー教などの宗教です。

天が支配者を任命した国民との身分の違いは自然の秩序である。支配者と国民の間には厳然とした身分の違いがあるのが当然のものとして約 2000 年ほど続いてきました。中国、インドでも東南アジアでも、しかしこの状況が近代になると一変します。それが近代に於ける西欧諸国のアジア進出と植民地化です。

ヨーロッパ諸国が何故アジアに来たのか、一言で言うと資源です。植民化をする為に西欧諸国は 2 つの事をしました。一つは西欧型官僚制をアジアに持ち込みます。もう一つは官僚を育成する為に近代知識が必要で、西欧型の大学をインドとかインドネシア、ベトナムとか各地に作ります。ガンディー、ネルーの様にイギリス等の植民地宗主国に留学する人も出てきます。そう言う一部の人達の間で今迄は王朝国家の儒教とかヒンドゥー教を受け入れていたが、それよりも近代西欧の思想の方が自分の国、社会に相応しいと近代思想を受け入れる人が出てきます。こう言う人が啓蒙思想家と呼ばれる人です。今日の話の中心は「中国近代化を巡る思想家たち」ですが啓蒙思想家の事です。

啓蒙思想家とは近代西欧思想の影響を受けたアジア人の事で、植民地であったインドとかベトナム、インドネシアもそうですが、植民地にならなかった中国にも出てきますし、日本も啓蒙思想家が出てきます。アジアの全ての国で啓蒙思想家が出てきます。その啓蒙思想家がどのような事を説いたのか、王朝国家や伝統思想を批判して政治思想の転換、国家は天や神が任命したのではなくて、国民が自らの生活を守る為に国民が作ったもので、これは近代西欧で社会契約説と言いますが、これに近い様な事も説く様になります。当然の結果として国家の主人公は誰か、王様、皇帝ではない国民主権なのだと言う様になります。

「西洋かぶれ」と言う言葉があります。啓蒙思想家との違いは何か、同じ様に近代西欧の思想、文明は優れていて感銘を受けた事は同じなのですが、自分はその西欧社会の一員になったと言う事で満足して自国の仲間を広めよう、近代西欧の文明によって王朝国家の政治思想を改革しよう、とする考えは全然ありません。自分が西欧社会の一員になった事でそれで満足した人、そう言う人を「西洋かぶれ」と言います。

これから話をする啓蒙思想家はそれとは違い、近代西洋文明で国家・国民の考え方を換えようと運動した人が啓蒙思想家です。この事で啓蒙思想家の意味が解って頂けたと思います。

今日の話の結論「啓蒙思想家の意義」に関わるのですが、近代 19 世紀の末から 20 世紀の始め百数十年前の啓蒙思想家の話が現代のアジアにとってどのような意味があるのか二つの点で言えると思います。

一つは、例えば中国の「権威主義、皇帝論、支配思想」が強い思想と、もう一つは「民主主義が優れている国民の自由」が必要と言う、王朝国家時代の政治思想と近代西欧で起こった民主主義思想との対立が起こっていますが、それが近代アジアに入り込んだ歴史的経緯が確認出来る事。

二つ目はこれと関連しますが、現代は中国の権威主義或いは軍政と民主主義を唱える人との間でアジアの多くの国で思想、言論の上での争いが起こっています。これは王朝国家時代の皇帝を中心とした政治思想と近代ヨーロッパから入った民主主義を中心とする政治思想が対立しせめぎ合いが起こって

て、何故、現在アジアの政治思想が混沌としているのか、その一因は王朝国家時代と植民地時代にアジアに伝わった政治思想とのせめぎ合いが現代において起こっていることにあり、その鍵を解くのが近代の啓蒙思想家で今日この話をする意義と考えています。

●福沢諭吉 (1835-1901)



アジアの国々に様々な啓蒙思想家が登場しましたが、最も時期的に早くて代表的な思想家が福沢諭吉です。これから中国とかインドの啓蒙思想家の先行事例として福沢諭吉が何を言ったのかと言う事を簡単に説明します。

福沢諭吉は大分県中津藩の下級武士の息子として生まれ、彼は二つの点に反発します。「士農工商」の身分制度、徳川体制を支えたのが「士農工商」の4つの身分制度で、それともう一つが儒教です。徳川封建体制が何故良いのかそれは儒教の教えに基づいたもので、この二つに物凄く反発します。彼がどう生きて行くか、新しい世界を求めたのが長崎で、そこでオランダ語を学びます。後に江戸に出て来た時に近代ヨーロッパではオランダ語、蘭学ではなく英語、洋学が重要として、彼は洋学者に転換します。徳川末期に彼は機会を捉えて欧米視察旅行に3回行き、欧米の社会を直接観察する機会を持ちました。日本を近代西欧文明によって作り変えなければならない、国民が変わらなければならない、その為には学校を作って勉強しなければならない、彼は慶応義塾大学を作り若い人を教育する傍ら日本の文明化と近代化を熱く説きます。まさにアジアを代表する啓蒙思想家です。

後に「脱亜論」を提唱しますが、これは後で話します。近代西欧文明に感銘を受けた福沢諭吉は啓蒙思想家としてどの様な事を唱えて日本を造り変えようとしたのか、福沢は「儒教は、ただ古を貴ぶことを教えるだけ」で「人間は平等：天は人の上に人を造らず」等々を「学問のすゝめ」「文明論之概略」で語りました。どの言説をどの書籍で書かれたかは煩雑なので、今日のレジメでは啓蒙思想家が語った言葉はどの書籍から引用したかは全て省略しました。昨年出版した『近代アジアの啓蒙思想家』は啓蒙思想家がどの書籍等でどう言う事を語ったのかを記載していますので参考にして下さい。

福沢は儒教に反発したと言いましたが「儒教は、ただ古を貴ぶことを教えるだけ」で、これから日本はどうしたら良いのか、それを儒教は一切教えてくれないので、これからの日本を考える時に儒教は邪魔になる。士農工商の身分制度に反発したと言いましたが、福沢は「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」、更には「国家の主人公は国民である」「近代西欧の源泉は科学である日本も西欧文明国の仲間入りをすべきである」と言い、これがまさに啓蒙思想家で、中国、朝鮮、インドの啓蒙思想家は皆この様な事を言います。福沢諭吉がユニークなのは何で日本は文明化するのか近代化しなければいけないのか、それは独立の維持で日本が植民地から逃れる為には西欧諸国と同じ様に近代文明で武装しなければいけない「独立が目的であって文明はその為の手段」であるとはっきりと言っていることです。その点で彼は啓蒙思想家とあると同時に愛国主義者であるといえます。福沢は「脱亜論」を唱えたと言いました。最初は中国も朝鮮も日本と共に近代化、文明化して植民地化を免れよう一緒になって戦おうと言っていたが、後には「中国も朝鮮も近代化出来ない、日本だけでも西欧諸国の仲間入りを唱えます。これが啓蒙思想家として福沢諭吉が唱えた事です。

福沢が唱えた文明化、近代化は日本の政治と社会のキーワードになりました。とはいえ、啓蒙思想を唱えた事によって日本も100%変わったのかと言うとそうではありません。福沢諭吉を始めてとして、中江兆民もそうですが啓蒙思想家は日本の文明化と近代化、民主主義化を唱えました。しかし明治国家の指導者の思想を支えたのは「天皇制国家」で、西欧諸国がやってくる前は皇帝の専制支配と言いましたが日本は天皇の支配する国である。天皇は神の子で皇国論、神国論、昭和に入ってからですが皇国史観が軍部を中心に唱えられました。中国、朝鮮、インドでもそうですが啓蒙思想家が文明化と近代化を唱えますがそれによって政治的な自由を尊重する民主主義国になったかと言うと、そうではありません。相変わらず王朝国家の政治思想が国家指導者を支配していたと言うのが実態です。

1. 中国の主な啓蒙思想家の言説

(1) 中国の王朝国家の改革の試み

中国で啓蒙思想家が登場して、近代化、文明化を説く前の中国はどうだったのか、どう言う契機に啓

蒙思想家が登場したのかの話しておきたいと思います。中国の王朝国家の改革の試みとあります。中国では皇帝の専制支配が二千年以上も続いて来ましたが、隋が最初の統一国家です。その後、漢、唐 20 世紀の始めまでが清で、その王朝国家を支えたのが儒教だと言う話をしましたが、もう一つ世界の王朝国家体制の中で中国の特徴は科挙です。高級官僚の登用試験の事です。試験科目は儒教の教を学ぶ儒学の知識を持っているか、文人として詩が書けるか、この二つが試験科目です。

儒学の知識と文人として詩の才能を持った人を高級官僚として登用して、この人達を中国各地の統治者として任命するのが王朝国家を支えた科挙です。科挙で面白いのは高級官僚の登用試験ですが男性ならば誰でも受験できました。その点で中国の王朝国家は皇帝の専制支配ですが、国を統治するものに関しては開かれていて世界では稀な例です。農民は別ですが科挙に合格するのが知識人の目標でした。

中国を儒教と科挙が支えて来たが、19 世紀後半にアヘン戦争が起きました。ヨーロッパの植民地化は初めは、南アジアのインドその後インドネシアなど東南アジアでしたが、そこを植民地化すると次は、中国、朝鮮、日本に植民地化の手が及びました。その最初の戦争が 1940 年に起こったイギリスと清が戦ったアヘン戦争で、清は完敗します。19 世紀終わりに日清戦争が起こりますが、朝鮮の支配権を巡る争いです。伝統的に中国は朝鮮を属国として扱って来たが明治維新で近代化した日本は朝鮮を影響下に置こうとして日清戦争が起こり清は完敗します。植民地化の危機です。今迄は儒教と科挙が中国の国家体制を支えて来たが、知識人の間で、このままでは中国が植民地化されてしまう、中国も日本に倣って近代化しなければならないと考えました。これが近代化の試みです。

どの様な近代化の試みが行われたのか、最初が 1860 年頃の「洋務運動」で、アメリカに留学生を派遣します。徳川幕府末期にアメリカとかヨーロッパに留学生を派遣した様に、清もアメリカに留学生を派遣して国家の近代化を図ります。次に起こったのが 1898 年の「変法運動」で、指導者は康有為と梁啓超です。ここでのポイントは皇帝の支配は変えないがヨーロッパや日本に倣って立憲君主制を目指す、これはヨーロッパの影響です。そして 1905 年に科挙を廃止します。これは啓蒙思想家が主張したからではなく清の政府や指導者が植民地化を免れるには国民の意識の近代化が必要で、その為には科挙は駄目だとして 1905 年に廃止しました。中国の王朝国家を支えて来た儒教と科挙がここで終わります。

中国の近代化の試みは短期的には保守派が巻き返し「変法運動」を指導した康有為と梁啓超は失敗すると日本に亡命します。日本は中国と朝鮮の近代化の一つの拠点になりました。何故中国で失敗したのか、それは考え方の問題です。「中体西用」論（「和魂洋才」論と同じ）というのがそうで、彼らが試みた近代化は、中国の伝統思想は優れているから政治思想は古来のままにして、西欧の近代技術だけ取り入れれば良いという主張です。西欧が何で近代化出来たのか、科学技術を支えたのが思想精神の問題でしたが、保守派が唱えたのは孔子の精神は優れているのでこれを維持しながら西欧の科学や技術を導入して中国の体制を補強すれば良いとする「中体西用」論ですが、しかし、最早小手先の技術が通用しない様な状況になっていました。これが近代化に失敗した要因です。

1911 年「辛亥革命」が起こります。孫文が指導した革命運動ですが、これによって二千年続いた王朝国家が崩壊して共和制の中華民国が誕生します。問題はこれによって近代化・民主化が行われた訳でなく、実際は清の王朝国家は倒れたが袁世凱が新たな皇帝になろうと試みる、これが象徴する様に中国の政治社会は辛亥革命によって王朝国家が崩れたのは良いが政治体制が混沌としてどの様な政治体制が優れて良いのか見えて来ない。これが 20 世紀の始めの中国の政治社会状況です。啓蒙思想家はこの様な政治社会状況を背景に登場して来た人達の事です。

(2) 啓蒙思想家たちの言説



●梁啓超 (1873-1929)

最初に梁啓超で思想家、ジャーナリストです、1898 年の変法運動を指導したが保守派の巻き返しで失敗して日本に亡命します。亡命先の日本で近代化に向けた言論活動を積極的に行った。どの様な事を言ったのか、「新民論」王朝国家の国民は古いタイプの国民で中国が近代化する植民地化を免れる為には「近代西欧思想と中国の優れた伝統思想を折衷した人間にならなければいけない」それによって中国は救われると言います。梁啓超は、国を作ったのは「国民が自分

の生命を護る為にみんなで国家を創った」これは近代西欧の国民主権です。「中国は民意が低いので、孫文が言う様に共和制は出来ないので立憲君主制が望ましい、憲法で制約されるのではなく優れた知見を持った皇帝が統治するのが現状では必要だ」、と言いました。梁啓超は啓蒙思想家で国民主権を説きましたが、実態は中国では王朝国家の皇帝と変わらない統治が当面は必要だというもので、これが梁啓超の限界です。その後出て来る啓蒙思想家になると民主主義に軸足が移って行きます。

●孫文（1866－1925）



孫文は医者で革命家です。ハワイと香港で教育を受け、近代西洋教育を学びました。「近代西欧は優れているので中国も清を倒して共和制にしなければいけない」これが革命家としての孫文で、5～6回革命に蜂起しますがすべて失敗します。日本とか東南アジア、アメリカ、ヨーロッパに亡命します。1911年辛亥革命によって清が倒れた後、彼は中国国民党を作って中国を共和制の国にしようとしませんが、袁世凱との権力闘争に敗れて権力を握る事なくこの世から去って行きました。

孫文はどの様な事を言ったのか、「王朝国家は国民を無視した存在である国民は自由・平等・博愛の精神を持つべき」これが有名な三民主義です。この言葉を見る限り孫文は梁啓超より他の誰よりも民主主義者です。その点で孫文は三民主義で象徴される様に民主主義を唱えた人として知られています。ただ孫文にも限界があり、その一つが「中国哲学は優れているので、西欧の物質文明を学ぶ」、どの様な事かと言うと近代西欧で民主主義思想とか文明化が唱えられたが政治思想の点では中国の王朝国家の政治思想が優れている。それをそのまま活かして西欧の物質文明を学んで補強すれば良い、これはまさに「中体西用」論です。「中国人には民族意識がない」「独立を維持するにはどうしたら良いか、彼は国民の自由・博愛・平等の三民主義が重要と言いますが、中国が独立を維持する為には国民に自由を与えるよりも国家の自由が大事」で、国家が統治に於いて自由度を持つ事が大切、何故ならば国家が強くないと独立を維持出来ないからだと言います。更に彼は共和制を唱えて革命を起こしたのですが「共和制が望ましいが、中国の現状を考えると有能な独裁者が必要」、自分が最高指導者になったら当面は独裁を行う。その理由は独立を維持するには強い政府が必要だからで、この点では梁啓超と殆ど同じで、民主主義、共和制を主張するが当面中国は独裁が必要だと言い、これも孫文の限界です。

梁啓超と孫文には伝統思想が色濃く残っていたが、次の陳独秀と胡適は100%の民主主義者で王朝国家批判です。胡適になりますと100%の民主主義者と言う事が出来ます。

●陳独秀（1879－1942）



陳独秀は当初は民主主義を唱えますが後に中国は共産主義が相応しいと主張します。彼も多くの中国の知識人と同じ様に科挙を目指しました。しかし清に失望して辛亥革命に参加するが失敗して日本に留学します。彼は日本に5回滞在了ました。陳独秀の特徴は、近代西欧文明に感銘を受けますが西欧文明を何処で勉強したか、勿論中国で英語とかフランス語を勉強して啓蒙思想の本を読んだが彼が啓蒙思想を一番勉強したのは日本です。日本に留学と亡命をして英語、フランス語、日本語の本で近代西欧文明、西欧思想を学びました。1915年中国に戻った後『新青年』を刊行してこれを足場にして華々しい啓蒙思想を開始します。1919年に中国で「五・四運動」が起こり、中国で最初の国民運動とされています。

第一次世界大戦が始まると中国に関心を持っていた日本は影響下に置こうとして「21か条の要求」を突き付けます。これに中国は反発し1919年に第一次世界対戦が終わりパリ講和会議に中国は日本の「21か条の要求」を否定するように要求します。しかし欧米諸国は戦勝国日本の立場を考えて否定する事を拒否します。その為中国国民が学生を中心に怒り新政府を攻撃批判し、「五・四運動」が起こり、中国での最初の民族運動とされています。この指導者が陳独秀です。

陳独秀は1915年に作った『新青年』と言う雑誌で華々しい啓蒙思想活動を行った事や、1919年「五・四運動」で清の新政府を批判して中国の自立化を求めた事で良く知られているが、もう一つ陳独秀の特徴的なものが2年後の1921年に中国共産党を結成して書記長になったことです。最初に陳独秀は民主

主義により中国の自立独立を維持しようと考えていたが、中国を変革するには民主主義では駄目で共産主義でなければいけないと考え、1919年のパリ講和会議で日本の「21か条の要求」の否定を欧米諸国に拒否され、欧米諸国は頼りにならないからこれからは共産主義によって中国を作り変えるしかない、として彼は共産主義者になりました。

彼はどのような事を言ったのか、「王朝国家は国民の福利を考えた事がなく国民にも愛国心がない」これは孫文と同じです。彼は儒教を徹底的に批判します。「儒教倫理は国民を抑圧する思想」でしかない「国家とは国民の事であり、国民の為に自由・平等・独立を基本にすべき、その為に国民は自立心を持つべき」これは近代政治思想のエッセンスです。「近代西欧は自由主義革命の賜物であり、青年も自立して自由主義意識を持つべき」これが象徴する様に陳独秀は「民主主義と科学」、この二つともヨーロッパの近代啓蒙思想のキーワードですが、それをスローガンにして中国の近代化を唱えました。後に中国を変革するには共産主義、階級闘争しかないという考えに変わりますが、しかし、共産主義体制のもとでも人権と自由尊重の思想は極めて大切であると言います。後期の陳独秀は共産主義者と見られていますが今の中国共産党の思想とは全く違います。その為に中国共産党は陳独秀を完全否定しています。

●胡適 (1891-1962)



胡適は、陳独秀と一緒に『新青年』で論陣を張った人で特徴的なのはアメリカ留学です。コーネル大学、コロンビア大学で7年間学び、民主主義や近代文明に目覚め、そこで完全に自由主義者・民主主義者になります。近代中国で数多くの啓蒙思想家が登場したが、その中で自由主義・民主主義を100%信仰した人は胡適です。

政治的立場で言うと、彼は共産党を批判して国民党を支持する立場をとりました。彼は政治主張よりも人間の自立、中国人の自立に関心があり、「アジア人は与えられた現状で満足するという意識の下で現状を受け容れるが、西洋人は満足しない事は神聖な事で大切な事なのだ」、だから西欧は近代化、文明化

が出来た。西欧に倣って中国でも「国家や社会には独立した人格が必要」と言い、人間の自立を説きます。彼は民主主義にもコメントして、孫文や梁啓超は民主主義、共和制が優れているかも知れないが中国人の現状は民度が低いので民主主義より独裁が必要だと言いましたが、胡適は「民主主義は分かりやすい制度であり中国でも普通の人びとが実践出来る」、だから今の中国に適用出来ると言いました。また、「性急な革命ではなく、国民の考えや行動様式をゆっくり変える変革」これが中国には必要だと主張しました。

●康有為 (1858-1927)



啓蒙思想家と言うよりも中国の近代知識層にこの様な人がいたというのが康有為です。梁啓超と一緒に1898年の改革を指導した人で、儒学知識人官僚家で、近代化を提唱したが失敗して日本やインドに亡命し、その後欧米を旅行して近代西欧社会を見聞したが帰って来ると、儒教の国教化を唱えました。自分は今迄西欧に倣った近代化を唱えたが、中国に必要なのは儒教で国教にすべきであると主張しました。その背景には、「フランス革命では平等と自由が唱えられたが、中国では2000年以上前に孔子が唱えたし、既に実現している」と言う考えがあり、彼のユニークさはここに 있습니다。儒教は決して皇帝の独裁を支える思想でなくて国民の自由と平等を保障したもので、中国では既に実現している。これからの中国は、王朝国家そのままではなく「世界の

人びとが一つの世界国家を創り、伝統的な中国の国家と近代西欧の国家を合わせた世界国家を創る、ここでは男女が平等の生活をする大同国家（西欧国家と中国の王朝国家を融合した平和な国家）」を提唱しました。これは壮大なユートピアです。

(3) 啓蒙思想に対する政党勢力の態度

啓蒙思想家の言説を見てきましたが、その主張は中国で反映されたのか、政治過程でどうなったのか。清が倒れた後の中国の表舞台に出て来たのは国民党と共産党です。国民党は民主主義国家を、共産党は中国を共産主義国家にするという対立が起こりますが、と同時に1930年代頃に始まりました日本の侵略に対して抵抗運動が起こって国民党と共産党が共闘します。

国民党と共産党が啓蒙思想に対してどう反応したか、蒋介石は民主主義と共産主義は中国文化に適合

しない、伝統思想がふさわしい、伝統思想とは皇帝の支配、専制支配のことです。中国共産党と対立した事もあり、蒋介石は 1949 年に中国と台湾の分断国家になると、国民党独裁を 1949 年から 1986 年頃まで行いました。台湾は一応共和制「中華民国」になりますが実際には独裁政治です。

中国は 1949 年に「中華人民共和国」が成立します。その特徴は二つあり、一党独裁と共産主義思想です。中国共産党は陳独秀と胡適にどう対応したか、陳独秀は無視します。1921 年共産党が作られた時書記長に任命されその後論争が起こり陳独秀は共産党から除名されます。除名されると中国における陳独秀の影響力はゼロになり、その為共産党は陳独秀を無視します。それに対して無視しなかったのが胡適です。台湾側に立ったと言う事もありますが共産党は胡適の徹底的な批判キャンペーンを行った。何故かと言うと胡適の自由主義思想は、中国共産党にとって民主主義、自由主義思想は否定されるべき思想ですが、中国の若い知識人の間で胡適の自由主義思想に共鳴する人が少なくなかったからで、共産党は政治支配を確立する為に徹底的に胡適の自由主義思想を批判するキャンペーンを行ないました。

日本でも福沢諭吉が啓蒙思想を唱えましたが実際の明治政府の指導者は天皇制国家と言う思想に捉えられていたと話をして、中国でも 20 世紀初頭に啓蒙思想家が登場して民主主義、自由主義が唱えられたが、実際の政治過程ではそれを否定する国民党と共産党が主権を握ったのが実体です。

2) アジア諸国

啓蒙思想家はアジアの殆どの国で登場したと言いましたが、ここでは中国と比較する意味で二つの国、朝鮮とインドを取り上げて見たいと思います。朝鮮の啓蒙思想運動は良くも悪くも日本の影響を強く受けました。インドは中国と並ぶアジアの歴史文化大国です。インドの啓蒙思想家としてガンディーとネルーを見ますが、中国とどこが同じでどこが違うのかを考えて頂ければと思います。

(1) 朝鮮

2 人の啓蒙思想家の話をする前に思想家が登場するそれ迄の朝鮮の動きを簡単に言いますと、中国の影響を受けて、1392 年に儒教国家の李氏朝鮮が登場し、儒教を体制の思想にします。中国は儒教と科挙ですが、朝鮮は科挙と両班、文官と武官です。朝鮮の高級官僚は特権官僚として両班が作られたことが、朝鮮社会の特徴です。近代になる迄李氏朝鮮の統治が続いて来たが近代になると日本の近代化の影響を受けます。

近代化の影響は、啓蒙思想が朝鮮にも伝わると同時に、政治の面で言うと植民地化を日本が朝鮮に迫ります。日本の近代化の影響を受けて、開化派知識人が登場して近代化運動が起こります。二つあり、一つは 1884 年甲申政変です。朝鮮は中国の影響を強く受けて儒教国家が出来ると、政治社会は中国の影響を強く受けた保守派が主流でしたが、近代になると日本の影響を受けた開化派・近代化派が台頭して、両派の対立が顕著になります。1884 年の甲申政変はベトナムの植民地化を巡って清とフランスの戦争が起こり、その結果清はベトナムに兵力を割くと、その間隙を縫って日本の影響を受けた開化派グループがクーデターを起こして朝鮮を近代化しようとしたのです。しかし開化派の指導者、朴泳孝が日本に亡命するなど、この改革は三日で失敗します。その後 1894～95 年に日清戦争が起こった時に日本の力を借りて朝鮮を近代化しようとしたのですが、これが「甲午改革」です。その一環として、1894 年科挙が廃止されます。朝鮮の近代化を試みた開化派は日本の支援を期待したが、ともに失敗します。ここでは 2 人の思想家を見ましょう。

●朴泳孝 (1861-1939)



最初は朴泳孝です。甲申政変の指導者で、最高指導者に金玉均がいたが思想家として評価されてなかったもので、ここでは朴泳孝の思想を説明します。朴は甲申政変が三日天下で終わると日本に亡命し、明治学院で近代西欧文明の勉強をして、日清戦争に日本が勝利し実質的に朝鮮が日本の影響下におかれると日本政府の支援で朝鮮に戻って再び活動を行いました。

彼は「朝鮮が停滞したのは、政府が因習、古い伝統に固執した為で国民に責任はない、日本に倣って近代化をしなければならない」、これはまさに啓蒙思想です。「政府が税金を国民に課すのは、国民を保護する為である」、朴泳孝はその積りで言った訳ではないが、これは社会契約論に通底するものです。この点では彼は啓蒙思想家で近代化主義者だったが、

「儒教を盛んにすれば朝鮮の国も再び盛んになる」と言います。結論を言えば植民地化を免れる為に日本の助けを受けながら近代化・文明化しなければいけない、しかし朝鮮の思想の基本は儒教にすべきだということです。その姿勢は儒教思想と近代西欧文明を折衷したもので、中国の梁啓超、孫文の近代化思想も伝統思想、儒教の影響を受けていると言いましたが、朴泳孝も啓蒙思想家であると同時に伝統思想、儒教の影響を受けていたという特徴があります。

●尹・チミ (1865-1945)



もう一人の尹・チミは全く違います。彼の特徴はアメリカの大学に留学してキリスト教徒になった事です。日清戦争 1895 年で日本は勝ちますが、日本の朝鮮に対する進出に反対して愛国啓蒙運動を主導します。日本の植民地にならない為には啓蒙思想、近代西欧思想で朝鮮人も自立しなければいけないと主張して啓蒙運動の主導者になりました。しかし 1910 年に朝鮮が日本に併合されると逮捕されて反日運動家から対日協力者になります。その結果 1945 年に第二次世界大戦が終わって日本の植民地支配が終わると、対日協力者だったと批判されて自殺します。その点で朴泳孝と違って日本の影響を良くも悪くも受けていたと言う事が出来ます。

彼の啓蒙思想家としての特徴は「儒教が朝鮮を地獄にした」とはっきりと言ったことです。朴泳孝は「儒教を盛んにすれば朝鮮の国勢も盛んになる」と言ったが、同じ啓蒙思想家で時期が同じでも儒教に対する考え方が全く違います。これ迄、朝鮮の教育は特権層のみに力を入れてきました。「王族ではなく普通の人、国民にも教育を」と彼は言いました。「朝鮮を救うのは儒教でも仏教でもないキリスト教なのだ」、近代西欧文明に強い感銘を受けたアジアの知識人中にはキリスト教に深い共鳴を寄せた人もいますが、尹・チミはその代表だったという事です。

二人の啓蒙思想家の足跡を見ましたが、朝鮮は 1910 年日本の植民地になります。日本は植民地にすると、尹・チミを逮捕し 1906 年に始まった愛国啓蒙運動を弾圧します。日本は啓蒙運動を朝鮮に広めたが、植民地にすると啓蒙運動を弾圧しました。日本の植民地支配が終わった後 1948 年に韓国と北朝鮮の分断国家になり、分断国家が出来た時は李承晩が民選大統領で独裁でしたが、1961 年から軍事独裁国家になり、1987 年民主化によって終わりました。中国と同様に韓国でも 1987 年迄は独裁体制が続きました。北朝鮮は独裁と言うよりも「疑似王朝国家」でもあり、世界でも珍しい逆戻りしたユニークな国家で、現在も終わる見込みがありません。

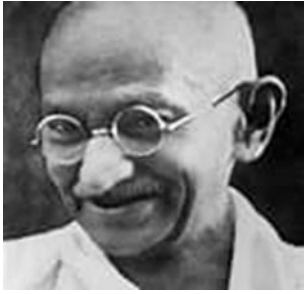
(1) インド

インドは中国の啓蒙思想家との違い、あるいは 1945 年頃の政治過程と比較しながら聞いて頂きたいと思います。インドはイギリスの植民地でした。ヨーロッパがアジアを植民地化しましたがインドはその象徴でした。ヨーロッパ諸国に植民地化されると近代西欧文明に影響を受けたアジアの知識人がアジアの殆どの国で登場しましたが、その最大の国がインドです。インドが一番西欧文明の影響を受けました。インドが目目されるのは 1857~58 年に「インド大反乱」が起こったことです。アジア最初の大規模な反植民地・独立運動です。インドはヒンドゥー教の強い国です。しかし、イギリスの植民地になる前の 13 世紀始め、イスラム勢力がインドを征服してイスラム国家のムガル帝国を作ります。その為インドでは政治支配者は少数派のムスリム、被支配者は多数派のヒンドゥー教徒でした。アジア最初の大規模な反植民地・独立運動は、ムスリム、ヒンドゥー教徒共にイギリスの植民地支配に反発して運動を展開したもので、この「インド大反乱」はインド社会全体を巻き込んだ反ヨーロッパ運動だった事に特徴があります。

イギリスはインドを植民地にすると官僚制と西欧型の大学を作ります。インドでは大勢のインド人官僚と西欧型教育を受けた集団が登場します。この人達が 1885 年にインド国民会議派を創設します。イギリスがインド大反乱で反発を受けた為に、それを和らげる目的でインド知識人を懐柔する協議会を作り、それに合わせて西欧型教育を受けた知識人がインド国民会議派を作りました。1947 年インドは独立しますがインドの独立政府は国民会議派で、ガンディーもネルーも国民会議派の最高指導者です。

ガンディー、ネルー共にイギリスに留学し弁護士でした。二人ともイギリスで西欧型教育を受けて近代化に目覚めるのですが、しかし近代西欧文明に対する姿勢はガンディーとネルーでは全く対照的です。

●ガンディー (1869-1948)



ガンディーの特徴は独立運動の原則「非服従・非暴力」にあります。ガンディーは近代西欧文明を受け入れながら他方では否定します。その理由は「近代西欧文明は物質文明で物質だけを追求している、精神は置き去りにされている」からで、精神を尊重する意味ではインドの伝統文明は優れているとみました。「中国で儒教は優れている」と同じかも知れませんが、ただガンディーは熱烈なヒンドゥー教徒ですがヒンドゥー教を基にインドを作り直そうとは少しも考えていませんでした。

ガンディーはどのようなインド社会を目指したか、その政治的発言は「インドの村落は村民が選んだ五人委員会が統治する自給自足の完全な共和国」でイメージするのは住民全員が参加するアテネの共和制に似ています。インドの伝統的な村落を基礎とした民主主義国家、これがガンディーの理想社会です。そこは「男女平等であってカースト差別を認めない」

カーストはバラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラの4つの厳然たる差別の身分制度ですが、アウトカーストと言いまして人間とは見なされない集団がいて実際には5つの集団からなります。アウトカーストはヒンドゥー教徒の16%ほどを占めています。ガンディーもネルーもカースト制度の人間差別を全面的に否定していますが、ヒンドゥー教はこのカースト制度を基本にするものです。

ガンディーは熱烈なヒンドゥー教徒ですが、カースト制度には反発して、「宗教は純粋に個人的なものであり、ヒンドゥー教を国家宗教にしてはいけない」と言いました。インドの伝統思想は優れているがヒンドゥー教国家を作ろうとしたわけではなく、近代西欧文明に反発したが政治社会としては自由と平等の村落を基礎とした民主主義社会を作ろうとしました。

●ネルー (1889-1964)

ネルーはイギリスへ留学して弁護士になったのはガンディーと同じですが、ガンディーが宗教の人だったのに対し、ネルーはアジアを代表する政治家です。1947年にインドが独立すると首相になり、1964年に亡くなるまで首相を務めたインドの最高指導者でした。その政治思想はガンディーと違い、近代西欧価値でインド国家と社会の変革を試みたことです。

具体的にどう言ったのか、「インドは伝統文明に固執した為に停滞して、植民地になった」。ガンディーはインドの伝統思想は優れていると言いましたが、ネルーは伝統文明がインドを駄目にしたと言いました。「近代西欧文明には問題があるが優れており、ダイナミックで前進的でその為に西欧社会には活気がある」、だから西欧諸国が世界を制覇した。ネルーは西欧諸国が世界を植民化した事は批判しましたが、世界を制覇した原因は近代西欧文明にあるとみました。

カースト制度に対しても厳しく批判して、「カースト制度は人びとを圧迫して、インドの行く手を塞いでいる、インドは宗教癖を減じて、科学に向かうべき」と宗教を否定して科学を尊重しました。まさに啓蒙思想のエッセンスです。その点でネルーは近代西欧文明の信奉者と言う言いすぎですが、強い感化を受けています。ネルーは「自由と平等こそが大切、とりわけカースト差別が続いているので平等が重要」と言います。この平等は4つのカーストの平等だけでなく、人間として見なされていないアウトカーストにも自由を与えて平等に扱うべきだ、と言うもので、その象徴が「投票権は全ての人に政治権力の平等な分け前を与えてくれる」ことから、ネルーはアウトカーストに対して手厚く投票権を与えたことです。この点でネルーはガンディーと比べた場合、近代西欧文明、政治制度に感化、感銘を受けている事が分かります。

独立後、インドの政治社会はどうなったか。1947年にネルー首相率いる国民会議派政府が成立して1980年頃まで続きます。民主主義制度の信奉者のネルーが首相を務めた事で、インドでは民主主義の制度化が高度に進みます。

ガンディーとネルーはヒンドゥー教もムスリムも宗教の違いもなく一つの国を作ると頑張ったが、少数集団のムスリムがヒンドゥー教徒と一緒に自分達は差別されると言う事でパキスタンと言う分離国家を作りました。それだけではなく、独立した翌年1948年にガンディーが暗殺されます。ヒンドゥー

一教徒過激派によってですが、ガンディーはヒンドゥー教徒だからヒンドゥー教の利益を守らなければならない、それなのにムスリムと一緒に一つの国家を作ろうとしてムスリムに譲歩した、ヒンドゥー教の尊厳を傷つけたという理由でした。最高指導者は宗教に関係なく一つの国を作ろうとしたが、民衆の間でヒンドゥー教、伝統宗教の根強い事が解かりました。

独立政府は政教分離を掲げた国民会議派が握ったが、現代のインドの政権党はインド人民党です。インドをヒンドゥー教国家にと主張している訳ではないがヒンドゥー教を掲げています。最新の 2019 年総選挙で、インド人民党が 303 議席、ヒンドゥー教と政治は別と唱える国民会議派は僅か 52 議席でした。だからと言ってインドがヒンドゥー教を掲げる国家になった訳でなく、制度としての民主主義をインド人民党も守っています。

おわりにー近代アジアの啓蒙思想家が現代に持った意義

「近代アジアの啓蒙思想家が現代に持った意義」これを三つ挙げてみたいと思います。1 番目、現在アジアでは民主主義、政治的自由が権威主義と対立、競い合う状態にあります。アジアに民主主義と政治的自由の思想が入って来たのが 19 世紀末～20 世紀前半に啓蒙思想家が唱えたものであって、中国も他のアジアの国々と同じ様な状況にあったことです。そこで日本が果たした役割、中国と朝鮮から多数の留学生が日本に来て近代西欧文明とか啓蒙思想を学んで中国、朝鮮に戻って啓蒙思想活動を行った、その点で日本が東アジアにおける啓蒙思想の拠点であったのです。重要なのは植民地時代に民主主義や政治的自由が実現したかどうかですが、そんな国は一つもありません。今日見て来たのは言説です、雑誌とか集会で言論を通じただけであって、政治運動を通じて民主主義や自由を政治体制として実現した国は一つもなかった。これは当たり前のことで、植民地国家がその様な事を認めるはずはない。朝鮮の啓蒙思想や文明化を日本は支援しましたが、植民地にすると啓蒙思想によって朝鮮の自立を守ろうとする運動を徹底的に弾圧したのは、ヨーロッパと同じです。民主主義や政治的自由が植民地時代末期に入って来たが、それは一部の知識人の考えに留まって現実の世界で実現した国は一つもないと言う事です。

2 番目、中国でも一部の知識人の考えに留まったのですが、現在も 1949 年の中華人民共和国の成立とともに厳しい権威主義体制が続いています。清朝末期に啓蒙思想が入って来て、中国共産党は党独裁のもとで共産主義思想を国是していますが、啓蒙思想は現在も中国社会の一部に底流として流れています。その一例として 1980 年代終わりに民主化運動が起こりました。その時に共産党を批判する一部の参加者が陳独秀の掲げた「民主主義と科学」をスローガンに掲げて運動を展開したことがそうで、底流として流れていました。ただこれは弾圧されました。

3 番目、今日のまとめですが、現在アジアの状況は「アジアの伝統思想（権威主義）」と「自由と民主主義」の競合状態にあります。「アジアの伝統思想」は 2000 年程続いて来た王朝国家の時代のもので、「自由と民主主義」は植民地時代に一部の啓蒙思想家の言動として登場したもので、1945 年の第二次世界大戦後アジアは「伝統思想（権威主義）」と「自由と民主主義」どちらがアジアの国家と社会の原理になるのかの競合状態にあります。ヨーロッパは王政の権威主義が否定されて民主主義が上位概念になるには数百年掛かっており、その点でアジアは 1945 年から、たかだか 70～80 年しか経っていません。

最後に言いたいのは、アジアに近代に啓蒙思想が登場したがそれで終わったわけではなく、始まったばかりで、現実の政治制度として実現するかどうかの状況にあるということです。

【質疑応答】

Q: インドのカースト制度の事についてお伺いします、ネルーがかなり大胆にアウトカーストの優遇措置をとったと言う話がありましたが、現実アウトカーストの待遇改善は殆ど出来ていないと思うが先生はどう思いますか。またガンディーやネルーはどのカースト出身なのかお伺いします。

A: 後の方の質問が簡単なので最初にお答えします、カースト制度はバラモン（司祭）クシャトリア（貴族階級）ヴァイシャ（平民）シュードラ（奴隷）の 4 つとアウトカースト（非人間）がありますが、ネルーもガンディーも一番上の階層のバラモンです。

重要なのはネルーもガンディーもカースト制度を否定して人間の平等を唱えた。しかし実態はそうで

はなく、インドが抱え直面している問題は、政治家が「人間は皆平等」という事で1人1票の投票権を与える、アウトカーストだけでなく少数民族にも特別に議会の枠を与えた、それによって制度上では民主主義制度を実現しているが、しかし実際の庶民、国民の行動は宗教の教えが極めて強いことです。それを象徴するサティ制度と言うものがあります。夫が死んだ時に妻を生きたまま夫と火葬してしまう制度で、これは残酷だとしてイギリスの植民地時代に禁止し独立政府になっても法律で禁止します。知識人の多い都会では行われませんが、農村では今でも行われ新聞等で報道されます。インドの直面する問題は「人間は自由で平等」と言う政治思想が政治制度として行われているが、実際の庶民の行動様式と中々一致しないギャップがあることで、このギャップをどう埋めるかが、インドが直面する課題一つです。

Q: 現在の中国を見ますとなかなか民主主義が根付かない現実を私達ほどの様に理解すれば良いのか、どの様な要因があるのか先生の見解をお伺いしたい。

A: 質問は簡単ですが答えは極めて難しいです。極めて重要な問題で直接の答えになりませんが、二つの事が言えます。一つは質問には関係がないのですが、中国は台湾との統一、台湾を取り戻す事に取り組んでいます。台湾はそれになぜ反対しているか一言で言えば、中国が民主主義の国ではないからで、中国共産党支配が崩れて別の政府が出来れば台湾は中国と一緒にしても良いと思います。

もう一つの問題は、中国共産党の一党独裁、民主主義・自由の否定はどうすれば終わるのかと言う事です。どうして続いているのか理由は二つあります。一つは、中国は2000年儒教の王朝国家、皇帝の政権が続いて来ました。植民地化の危機が迫ると啓蒙思想家が出て来て専制支配を否定する動き言説を展開します。しかし1949年に分断国家になって中国共産党が実権を握ると「共産主義思想で中国を変える」と頑張ったが、1990年頃から中国共産党は共産主義思想が優れているから支配するからでなく、我が党だけが経済成長によって国民を豊かに出来るとして、中国共産党支配の正当性を共産主義思想から「経済開発によって国民を豊か」にするに変えました。もう一つは、中国は14億人の人口がおり、豊かになったと言ってもほんの一握りで、仮に4億人が豊かになっても10億人は農民でまだ貧しい。この農民は都市の人と同じ様に共産党の支配下で豊かになりたい。その為には現状で良いと言う事で共産党支配の原理が崩れません。中国で日本のかつての時代と同じ様に、殆どの人が自分達も豊かになったとの意識を持たない限り共産党支配が中国内部から緩むことはありません。欧米諸国がいくら民主主義は良い自由が優れていると言っても、中国国民が共産党支配は駄目だと思わない限り体制は変わりません。多くの国民の期待しているのは、上位4億人と同じ様に自分も豊かになりたいと言う事で、その事によって中国の共産党支配は終わりません。

今中国は自分達の原理で共産主義と言うよりも中国のやり方を世界の原理にする事に自信を持っています。なぜかと言うと経済発展だと思えます。1950~60年代の中国は貧しい発展途上国でその為に欧米諸国の技術、資金が必要で国際的な政治主張はしなかったが、今の中国は今後10年位でアメリカを抜いて世界最大の経済大国になるとみられています。経済が豊かになると自信を持つ、民主主義とか自由思想で中国が豊かになった訳でなく、中国の伝統思想が優れていたから我が国は豊かになったと中国の政治家は考えていると思えます。本当に中国が民主化される為には、他からの圧力ではなく残されている約10億人の国民が経済成長で豊かになって自由とか平等が欲しいと思う迄は難しいのではないかと思います。

岩崎 育夫 (いわさき いくお) 先生のプロフィール

【略 歴】

1949年 長野県生まれ
立教大学文学部卒
アジア経済研究所地域研究第一部 主任調査研究員
元拓殖大学国際学部 教授
現在 アジア研究者

【主な著書】

『リー・クアンユー』岩波書店 1997年
『アジア政治とは何か』中公叢書 2009年
『物語 シンガポールの歴史』中公新書 2013年
『アジアの国家史』岩波書店 2014年
『世界史の図式』講談社選書メチエ 2015年
『入門 東南アジア近現代史』講談社現代新書 2017年
『アジア近現代史』中公新書 2019年
『近代アジアの啓蒙思想家』講談社選書メチエ (2021年)